

当たる。ある夜、無錫で挺隊と連絡後、クリークの艇に戻る途中、城壁の下で鋭い「誰何」の一声があった。維新政府軍の歩哨である。私は月光を浴びて丸見え、相手は真っ暗、とっさの事で「日本兵」が出ない。次の「誰何、誰何、パン」で万事休す、「友軍に撃たれるとは、ああ情けない、犬死にだ」などと一瞬のうちに考える。急に相手が月の中に出て敬礼する。こちらの逃げ隠れもしない態度（実は動けなかった）で先方は友軍と認めたらしく、命拾いをした。

そして八月十五日終戦、負けていないのに降伏とは……。かくてわが国は敗者の裁判を受けた。

古今東西を問わず、歴史はいつも勝者の手で書かれた。しかし、歴史は古くなるほど新しくなる、とも言われる。つまり、勝てば官軍式に当初曲げられた歴史も、しかるべき歳月を経て真実が洗い出され、修正されるのである。

## 戦争と食糧

愛知県 松井信一

私は戦争中の都市の大空襲など、その激しさや悲惨さは、その当時は軍隊に居たので少しは耳にしていたが、直接経験していない。また、軍隊に居たと言っても内地勤務だったので、生命を懸けた戦いの激しさ、苦しさなどもわからない。従って私は、戦場でも銃後の国民の生活上も、無くてはならない食糧について考えてみることにした。何にしても五十余年前のことであり、年とともに薄れてゆく記憶をたどりつつ書いてみた。確証は無く、記憶違いであるかもしれない。また、書いたことは断片的であり、まとまりもなく、意味のないものであるかもわからない。

昭和の初め私は小学生だった。その頃の農家の生活は大変貧しく、毎日のくらしは全くお粗末なものだっ

た。しかし、それは戦争の時とは違い、食糧はあっても農家に収入がなかったからである。

その頃の農家の食事は米五・麦五の半白飯なら良い方で、米三・麦七というご飯の家もあった。おかずは野菜だけ入れた味噌汁、たくあん、梅干しぐらいで、子どもも大人も同じだった。それでもたまにお客のあった時や盆・正月・お祭りなどには特別に豆腐・あげ・ちくわ等が買われ、それは子どもにとって大変嬉しいことであり、また待ち遠しいこともあった。

不況で幕を明けた昭和の初め頃、繭や米の値段が大暴落したので、米作りや養蚕農家は大恐慌に襲われた。農家の収入は途絶え、生活は悲惨そのものだった。農家は作物を作れば作るほど肥料代などの経費がかさみ、作物を売っても、その経費を支払うことが出来ず借金として残った、と聞かされた。石川啄木の

『はたらけど はたらけど猶わが生活』

業にならざり ぢっと手を見る』

という歌と共に、当時の農家の悲惨な有り様が思いだされる。

やがて昭和六（一九三一）年に満州事変、昭和十二年には支那事変が起き、昭和十六年十二月八日太平洋戦争へと、出口の見えない泥沼の戦争へと突入した。

満州事変、支那事変、太平洋戦争へと戦いが進むにつれて、我が国の食糧事情は悪化していった。農家では働き手が次々に召集され、労働力が不足してきた。いかに増産が叫ばれても、後に残されたのは老人、女、子どもで増産どころではなくなった。その労働力を補うなどということは到底考えられないが、国民総力戦が叫ばれ、私たちも、また一般の人々も自分の仕事のやり繰りをして、出征兵士の家に労働奉仕に行った。鎌・鍬等を手にとり、慣れない仕事に真剣に取り組み、奉仕をしたものである。しかし、いつ終わるともわからない戦いと共に食糧事情はだんだんと悪化していった。

戦争が長期化すると共に、国内の平和産業はほとんど軍需産業に変わり、戦争遂行のための兵器や軍需物資の生産が中心となった。従って人々の生活に必要な食糧・衣料等の生活物資の生産は激減し、私たちのく

らしは毎日に苦しくなった。

やがて生活物資の統制が次々に行われ、配給制に変わっていった。人々の生活にも、戦争遂行上に欠かすことのできない食糧も、昭和十六年四月より配給制になった。配給量は大人一人二合三勺（〇・四一四リットル）と決められた。生産農家でも、家族の配給量しか保有が認められず他は供出した。米穀の自由販売は一切禁止された。

戦争が拡大するにつれて食糧の需要は増大し、その反面、生産力は落ち生産量は減少してきたので、このような制度も焼け石に水の状態だった。人々の生命の糧である食糧の統制は、人々のくらしを大変苦しいものにした。しかし、人々は一言の小言も言わず、歯を食いしばって我慢し、戦争遂行に協力した。

私は昭和十八年頃G町小学校に勤めていた。児童数は千五百人ぐらいの大規模な学校であった。戦争が激しくなり、食糧事情も悪くなってきた。その頃学校では給食を始めた。当時としては画期的な試みであり、他校にはあまり例を見ないことであつたと思う。給食

といっても副食だけで、汁物が中心であつた。

秋のある日、全校児童に袋を用意させた。校庭に集まった児童に、校長先生から「今から稲を食い荒らす稲の大敵、イナゴのせん滅作戦を行います。みんなたくさん捕まえて、イナゴを全滅させてください」とのお話を聞いて勇んで郊外の稲田に向かった。広い田んぼに到着すると、横に並んでイナゴ捕りを始めた。逃げるイナゴを捕まえては袋に入れた。悪戦苦闘の末、みんなたくさん捕まえて意気揚々と引き揚げた。明くる日の給食はイナゴの佃煮だった。口に合わない子もいたようだったが、みんな喜んで(?)食べれた。食糧増産と不足してきた栄養食品確保のひとつまだった。

私は食糧の配給時代の初期は寮生活や下宿生活をしていた。下宿の時代には食事は一切下宿のおばさんに任せていたので、食糧を自分で賄うなどということはない。また買おうと思っても売っている店もなかった。三度の食事以外に口にできる物は何も無かつた。

昭和十七年の中頃までは連戦連勝で、戦線はどんどん拡大していった。それに伴って食糧の需要も増えた。反面、内地の食糧状況は悪くなるばかりで、食糧の不足が身にしみてきた。下宿の盛り切りの一ぜん飯もだんだん少なくなってきた。副食も言うに及ばない。日に日に追いつめられて行く状況のもとでは如何ともしがたい。いかに小食の私でも腹をすかすことが多くなった。しかし、それを補う方法はない。じっと我慢するしかなかった。「欲しがりません、勝つまでは」 私たちはこれを合言葉に、大人も子どもも自由を耐え忍んで戦争に勝つために頑張ったものである。やがて、私も召集を受け軍隊に入ったので、その後国内の食糧状況は知る由も無い。

私の入隊した部隊は、輓馬の重砲隊であった。班には三十頭近くの馬がいたと記憶している。馬部隊では、馬をととても大切にされた。「お前たちは一銭五厘でいくらでも来るが、馬はそういうわけにはいかない」とよく言われたものだ。兵隊は一銭五厘の切手を貼った手紙で集められるが、馬を集めるには沢山のお金が

かかる。実際馬部隊では、馬に故障が起これば行動は出来ないのである。

馬部隊での兵隊の生活はどうしても馬が中心になってしまう。朝昼晩の馬の飼付けと世話は大変なものであった。限られた時間内に、しかも小人数の兵隊で三十頭近くの馬の世話をしなければならぬのだから。

ある日の昼、馬の世話に時間をかけ過ぎて班に帰った。その日の昼食はあいにく大豆の炊き込み飯だった。よく噛んでいたのでは午後の日課の呼集に合わないで、お茶漬けで急いで食べた。元来胃腸の弱かった私であるので効果はつき面、物凄く下痢に襲われた。お陰で一週間もの病室通いで、体重が三キロも減ってしまった。とんだ大豆飯騒動だった。

軍隊でも、日常の食事は、大豆だけでなく、いろいろな代用食品が混入されるのが常で、麦飯などは上等だった。馬には麦（麦は麦でもライ麦）を食わせても、人間はコウリャン飯と嘆いたものである。

昭和二十年の正月は浜松の宿営で迎えた。

昭和十九年の末、私の居た部隊は部隊長指揮のもとに浜松方面に演習に出た。私も大隊本部観測班の一員として、東南海大地震で壊滅的な大被害を受けた静岡の工業地帯の惨状を見ながら東海道線を西下し、浜松駅に降りた。そして日商校に駐屯した。東南海大地震の被害の実態など、私たち兵隊は知る由も無い。まして、それが戦況に及ぼす影響等分かるはずもない。

サイパン島も既に玉砕し、戦況は我が国にとって日に不利になってきた。サイパン島を基地にして、米軍の本土爆撃は熾烈を極めてきた。そんな情勢下であったが、正月の御馳走に雑煮が出された。餅を食事当番がかまどで焼いて澄まし汁に入れた物だった。そのうえ少々酒、数の子が出された。

この差し迫った情勢の時に、形だけとはいえこのような御馳走を頂き、新年を迎えることの出来たことは、私たちにとって大きな喜びであり、感激でもあった。私たちは、みんなで祖国の必勝を祈り、新年をお祝いし合ったものである。

雪の降りしきる夜、駐屯先の学校の門前で歩哨に

立っていた。一寸先の見えない暗闇であった。寒さが厳しいのでじっと立ってはいられない。銃を小脇に抱え、足に力を入れて足踏みをしていた。ふと、足音がする。軍靴の音ではない。わら草履の足音のようだ。「今ごろ誰だろう」と背を低くして透かして見たが分からぬ。

「誰だ」と誰何した。すると「兵隊さん寒いでしょう。お芋を持ってきたから食べてちょうだい」と言つて紙に包んださつまいもを差し出した。「はっ」と思った。軍律の厳しい軍隊、しかも立哨中である。固く断つたが、押しつけて帰って行った。「ありがとう」と小声で言つて外套のポケットに入れた。温かさが衣服を通して腹の底までしみわたつてきた。恐らくわが子を戦場に送っておられる方だろうと涙が出てきた。

終戦の年、私は一兵士として南九州にいた。沖繩戦が熾烈を極めていた頃である。私たちは米軍の上陸に備えて、陣地構築に当たっていた。私のいた部隊は昭和二十年四月の動員で、三島の九部隊を中心に編成された部隊である。動員された兵の中には十九歳の現役

兵が大勢いた。昭和十九年から徴兵年令が一年早くなったからである。年が若くて入隊してきた兵隊なので、その教育には気をつかうことが多かった。しかし、戦時態勢下でもあり軍律は厳しかったが、何と云ってもまとまった兵舎があるわけではなく、民家や学校に分宿している状態では白ずと限度があった。初年兵の教育など思うようにはいかなかった。

六月には、沖繩の守備隊が玉碎し、沖繩は米軍の占領するところとなった。沖繩を基地とした米軍の本土爆撃もますます激しくなり、本土決戦も現実の問題となってきた。米軍の上陸に備えて部隊の作業も夜を日について行われた。年も若く、体力もまだ十分でない初年兵にとっては過酷な労働であったと思われる。また食糧事情も最悪であり、食べ盛りの初年兵では給与される食事だけでは腹を満たすことは到底出来なかっただろう。訓練は厳しく、作業は重労働であり、体力の消耗は激しく、過労で倒れる者も多くなった。

それに対して私のいた兵舎に臨時の病室が設けられた。入室患者は下痢患者が多いと聞いた。その入室し

ている患者が同じ兵舎にあった食糧倉庫から米や大豆などを持ち出して、生で食べたと聞いた。恐らく下痢患者であるから一層の空腹に耐え切れなかったためであろう。栄養失調で亡くなる兵もあったという。

昭和二十年も半ばになると、副食等の入手も困難になったのか、使役を出して、山吹等の山菜を採って食糧にした。また漁師の経験者を集めて、海に出て魚をとり給食に供したこともあった。このように軍隊といえども食糧は自分の手で確保しなければならぬほど切迫してきたのだろう。このような状態では、戦争遂行にいささか覚束ないものを覚えると共に戦況風雲急なることを思わざるをえなかった。

国民が総力を挙げて戦った甲斐もなく、日本は戦争に破れた。八月十五日、天皇陛下の玉音放送で苦しかった戦いは終結した。しかし、人々にとって生きるためには、どうしてもなくてはならない食糧。この問題は戦争終結と共に解決される問題ではなかった。戦後も戦中も同じである。あるいはそれ以上であったか

もしれない。米軍の爆撃により街は焼け野原となり、その犠牲になった人々が浮浪者となって巷に溢れ、餓死者も続出した。しかし国内には確保された食糧は皆無であり、そのうえ生産能力も失ってしまった。

国民の飢餓を救う手立ては全く無く、アメリカ諸外国の援助に頼るほかは無かった。食糧問題は終戦と共にさらに混乱の道をたどることになった。このような惨状や苦しきは、現在のような豊かな時代に生きる人々には恐らく想像もつかないことであろう。また、このような不幸なことが繰り返されないことを願うものである。